

塩谷郡市医師会だより

Contents

- 1 塩谷郡市医師会第 65 回定時総会開催
- 2 医師連盟第 11 回通常総会開催
- 3 学術講演会報告
- 4 平成 24 年度行事予定
- 5 シリーズ「塩谷医療史」10

一般社団法人 塩谷郡市医師会
広報委員会

〒329-1312

さくら市桜野1319番地3

さくら市氏家保健センター内

TEL 028(682)3518

FAX 028(682)5760

塩谷郡市医師会第 65 回定時総会開催

平成 24 年 4 月 7 日(土)午後 5 時半からさくら市のホテル清水荘で開催された。総会に先立ち、平成 23 年度にご逝去された黒須節三先生、根本毅雄先生に黙とうをささげた。医師会員数 98 名中出席 32 名、委任状出席 44 名、計 76 名出席で総会が成立した。



阿久津博美議長により議事進行が行われた。初めに山田会長の挨拶と会務報告があり、続いて、以下の議案についての審議と報告があった。

第 1 号議案 平成 23 年度塩谷郡市医師会事業報告並びに収支決算の承認を求める件

第 2 号議案 平成 23 年度塩谷郡市医師会貸借対照表及び損益計算書の承認を求める件

第 3 号報告事項 平成 24 年 3 月 31 日現在財産状況の報告について

第 4 号報告事項 一般社団法人塩谷郡市医師会の認可と登記完了の報告について

第 5 号報告事項 平成 24 年度塩谷郡市医師会事業計画並びに収支予算の報告について

第 6 号議案 会館建設準備積立取崩の承認を求

める件

第 7 号議案 平成 24 年度、平成 25 年度役員と委員会委員の承認を求める件

第 8 号議案 定款施行細則の承認を求める件

第 9 号議案 財政再建計画の承認を求める件

第 9 号議案の財政再建計画は A 会員の年会費の段階的値上げも含めたものであったため、多くの質問が寄せられたが、平成 25 年度の値上げの後には今後の推移を見ながら行うこととなった。また森島真会員から、日本医師会の医療機関禁煙宣言に準じた宣言を塩谷郡市医師会でもホームページなどで出したらどうかという提案がなされ、了承された。

栃木県医師連盟塩谷郡市支部第 11 回通常総会開催

塩谷郡市医師会定時総会の終了後、栃木県医師連盟塩谷郡市支部通常総会が開催された。平成 23 年度活動状況が報告され、平成 24 年度予算と役員人事が承認された。

定時総会と医師連盟通常総会の終了後に、懇親会が開催された。尾形新一郎副会長の司会で平成 23 年度及び 24 年度の 6 人の入会者の紹介があり、新しい会員を交えて歓談が行われた。



塩谷郡市医師会ホームページ/メール	広報委員会編集部	医師会事務局
URL http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/ メール shioya@tochigi-med.or.jp	岡 一雄 r2d2@msh.biglobe.ne.jp 尾形新一郎 ogata@o-ga-ta.or.jp	桑川 kumekawa.shioya@gmail.com 高橋 takahashi@e-shioya.jp

平成 23 年度第 4 回役員会報告

平成 24 年 3 月 5 日（月）午後 7 時からさくら市氏家保健センター医師会事務室で開催された。

4 月 7 日（土）に行われる第 65 回定時総会に向け、平成 23 年度決算見込み、平成 24 年度予算案、総会付議事項などについて話し合われた。

出席者：山田会長・尾形副会長・岡副会長・池田・後藤・軽部・佐藤・佐野・大草・半田・越井・谷口・高橋・手塚・江口・（総会議長、副議長）阿久津・村井・（医師連盟）仲嶋・植木・糸川事務長

講演会報告

・主治医研修会

「世界標準に達したアルツハイマー病治療薬」

日時：平成 24 年 2 月 10 日（金）

講師：自治医科大学神経内科



准教授 藤本健一先生

介護保険委員会主催の主治医研修会は、高齢化社会が進むに従い、罹患する人が増え続けているアルツハイマー病の新しい治療薬について行われた。

・糖尿病・慢性腎臓病（CKD）研修会 「症例で考える糖尿病治療」

日時：平成 24 年 2 月 28 日（火）

講師：高田クリニック 院長 高田良久先生

県の委託事業として一昨年から糖尿病・慢性腎臓病（CKD）研修会が行われている。今年は糖尿病の現地医家で有名な高田先生に話をさせていただいた。高田先生は豊富な糖尿病の症例を提示して、実際の治療法について話して

いただき、大変参考になる講演会であった。



・学術講演会 「死体検案について」

日時：平成 24 年 4 月 24 日（火）

講師：獨協医科大学法医学講座

助教授 黒須 明先生

警察医の仕事がどんなものかは一般の医師会員は漠然としか想像できないかと思う。塩谷郡市には矢板警察署（矢板市・塩谷町管轄）とさくら警察署（さくら市・高根沢町管轄）のふたつの警察署があり、それぞれの地区に警察医がいて検視などの仕事を行っている。矢板警察署の警察医であった赤沼先生（尾形クリニック）が 3 月末で退職。さくら警察署の警察医であった根本先生が急逝し、さくら警察署は小林正樹先生ひとりとなった。現在矢板警察署の後任の警察医の選任は難航している。こんな事態に医師会では警察医の仕事と死体検案の実際について一般会員に知ってもらうために急遽今回の講演会を企画した。

獨協医大法医学教室で司法解剖の第一線で活躍している黒須先生の話はなかなか刺激的で勉強になり、久しぶりで医学生に戻ったような気持ちになった。



平成24年度学術講演会など予定表

- 4月24日(火)「死体検案について」
- 5月22日(火)「関節リウマチの診断と治療：最近の考え方」
- 6月19日(火)「知ってほしい眼疾患」
- 9月20日(木) 産業医研修会
- 10月2日(火)「食物アレルギー」
- 10月18日(木) 産業医研修会
- 11月20日(火) テーマ未定
- 2月19日(火) テーマ未定

注：5月1日時点での予定なので、日程やテーマなど変更する場合があります。

平成24年度都市医師会行事予定

平成24年

- 4月7日(土) 定時総会
- 5月7日(月) 第1回総務会
- 5月28日(月) 第1回役員会
- 7月27日(金) 講演会と納涼会(矢板)
- 9月3日(月) 第2回総務会
- 9月24日(月) 第2回役員会
- 10月28日(日) 市民公開講座(塩谷町)

平成25年

- 1月25日(金) 講演会と新年会(高根沢)
- 2月18日(月) 第3回総務会
- 3月4日(月) 第3回役員会

開院しました(2/10)



根本医院
院長 根本祐太 先生

さくら市桜野 1250
028-682-2800



開院しました(4/2)



おのこどもクリニック
院長 小野三佳 先生

さくら市狭間田 1923-1
028-681-1600



開院しました(5/7)



高根沢皮膚科
クリニック
院長 池田雄一 先生

高根沢町宝石台 2-5-18
028-675-2111



根本医院の根本鞆雄先生が、平成24年2月9日にご逝去されました。享年73才でした。謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

インフルエンザについて

今年の2月から4月初めまでA型、B型両方のインフルエンザが流行し、会員諸氏は診療に追われたシーズンだったかと思うが、幸いなことにいわゆる季節性インフルエンザであったため2009年の新型インフルエンザの時のような混乱はなかった。説明するまでもないが、20世紀の新型インフルエンザの世界的流行（パンデミック）と言えば1918年のスペイン風邪、1957年のアジア風邪、1968年の香港風邪、1977年のソ連風邪である。スペイン風邪は世界中で6億人が罹患し、3000万人が死亡したと推測されている。当時の世界人口20億人の30%ほどが罹患した計算になる。ちなみに日本では2300万人が罹患し、39万人が死亡した。

インフルエンザはかつて流行性感冒（略して流感）と呼ばれていたが、時代により病名（呼び名）が変わる。平安時代は「シハブキヤミ」と呼び、咳病、咳逆、咳逆病、咳漱などの字が当てられた。シハブキは咳のことを意味するが、咳漱（せき）が主症状の一つであるインフルエンザの特徴を表している。鎌倉時代からは咳病をガイビョウと音読するようになった。江戸時代になり、庶民は風邪、風疾、流行風（はやりかぜ）と呼ぶようになった。医師は傷風、時気感冒、天行感冒、天行中風などと呼んだ。流行性感冒という病名は明治23（1890）年の春、日本でインフルエンザが大流行した時に初めて用いられた新用語である。

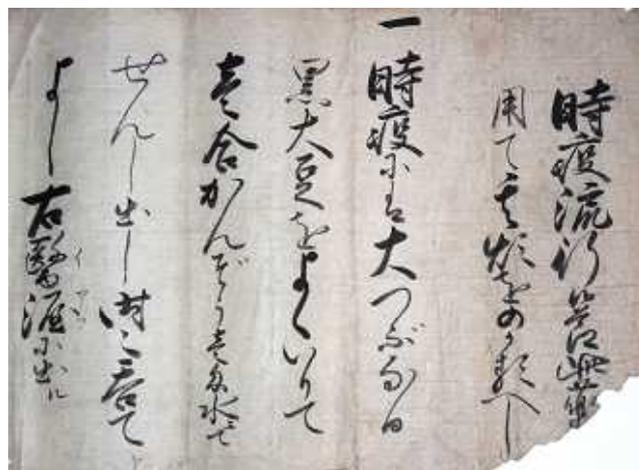
江戸時代の半ば以降はインフルエンザが大流行すると、その時の世事に因んだ名称がつけられるようになった。例えば天明4（1784）年の流行は天下無敵と言われた横綱の谷風梶之助もあつけなくかかってしまったため「谷風」と名付けられ、享和2（1802）年の流行は八百屋お七の小唄が流行っていたため「お七風」と名付けられた。安政元（1854）年の流行は、アメリカ人が黒船で横浜沖に来た（ペリー再来

航）頃であったため「アメリカ風」と名付けられた。

江戸時代最大の流行は享保18（1733）年に起きた。この年は飢饉の後に流行したのだが、アメリカやヨーロッパでもインフルエンザが大流行した年である。大阪では33万人以上がかかったとの記録が残る。日本各地では藁で流行病神の形を作り、これを鉦や太鼓を打ち鳴らして皆で囃しながら海辺まで送る風神送りが盛んに行われた。近世は勿論のこと明治時代くらいまで、インフルエンザなどの流行病は疫病神が起こすものとの考えが一般的であったため、疫病神を祭ったり、疫病退散を願う祭りが盛んに行われたのである。天然痘除けのために栃木県の北部地方で行われた疱瘡神送りも同じような祭事である。

このインフルエンザ流行に際し、幕府はお触れを出したが、それに関する大変貴重な文書が喜連川藩の御典医であった大草家に残っている（写真）。長さ3m超の巻物で100行余の文書である。「時疫」という言葉が盛んに出てくるが、江戸時代は流行病のことを時疫と呼んだ。ここには流行病が起こった時に注意すべき食事や薬の使用法について書いてあり、さらにこれを各地区に伝えるように記されている。

（担当：岡 一雄）



大草家に残る「時疫」に関する文書